

常用漢字の字音を音符で見分ける

—長さの違いはどこから来たか¹—

黒沢晶子（山形大学）
akuros9638@gmail.com

【要約】

本稿では、同じ音符グループ内に長さの違う字音があるのはなぜかについて、その要因を考察した。ひとつは日本語の音節構造から見た字音受容と変化の歴史という側面である。また、もうひとつの要因として、特定の字音を含む語がある時期に数多く作られ、高頻度に使われるようになったという語彙史の一側面を取り上げた。

1. はじめに

漢字は、音符を共有していれば、次の例のように字音の母音や長さが共通していることが多い。

例1 音符 戸：戸 雇 顧 こ

例2 音符 亢：航 抗 坑 こう

実際に母語話者も未知の漢字に出会えば、無意識のうちに音符から字音の類推をしているものであり、音符は漢字学習にも大いに役立つ。ところが、中には次の例のように、長さの異なるケースがある。

例3 音符 呆：保 ほ 褒 ほう

本稿では、教材作成の基礎資料として作成した常用漢字の音符別字音データから、字音の長短に焦点を当て、音符が共通で長さが異なるのはなぜなのかを字音受容の歴史と語彙史の観点から論じる。

2. 呉音の単母音化—同じ漢字の字音に長短があるもの

音符と音符グループの字音を見る前に、同じ漢字にふたつの字音があり、そのふたつに長さの違いがあるものを見てみたい。表1は、呉音が短音、漢音が長音の組み合わせを持つ字の例である。字音は中国語中古音とのつながりがわかりやすいように歴史的仮名遣いで表記してある。

¹ 謝辞：本研究は科研費基盤（C）「漢字音の長音教材 開発—漢字音対照と音符を用いて—」（課題番号17K02837 2017～2019年度）の助成を受けた。

表 1 : 同じ漢字の字音に長短があるもの

	中古音 ²	呉音	語例	漢音	語例
九	kǐəu	く	九時	きう	九人
留	liəu	る	留守	りう	留学
有	γǐəu	う	有無	ゆう	有名
頭	dəu	づ	頭痛	とう	先頭
口	khəu	く	口調	こう	人口
工	kuŋ	く	工夫	こう	工事

ĩ 超短音

これらの字の呉音と漢音に長さの違いが生じたのは、中古音（隋唐音）を受け入れた当時の日本語（大和言葉）には、拗音や二重母音がなかったことと関係がある。大和言葉の音節は、基本的に CV 構造だったのに対して、中国語の音節は、CV、CVV、CSV（S：半母音。CSVは拗音の構造）、CSVV、CVCなど、日本語に比べてはるかに複雑な構造を持つものが多くあった。それが日本語には、どう受け入れられたかを見てみると、次のようである。

音節構造	字	中古音	字音
CV	可	k ^h a	か
CSV	具	gǐu	ぐ
	御	ŋǐo	ご（呉音）
	過	kua	くわ
	摩	mua	ま

中古音と比べてみると、青字で示した字音のように、原音のすべての要素が使われていないものがある。脱落した要素を赤字で示す。上の例では、「過」は「くわ」としてSを表しているが、「具（ぐ）」「御（ご）」「摩（ま）」では、CSVのSが落ちている。

音節構造	字	中古音	字音
CVV	大	dai	だい
	口	khəu	く（呉音）
CSVV	九	kǐəu	く（呉音）
	世	sǐɛi	せ（呉音）

「大（だい）」には二つの母音が生きているが、「口（く）」からはCVVの中間のV、「九（く）」からはCSVVの中間のSV、「世」からはCSVVのSと音節末のVが脱落して日本語本来のCV構造となっていることがわかる。これらの例に見られる単母音化は、河野（1979：547-548、551）によれば、呉音の古い層に見られ、二重母音を嫌う日本語にそれらの字音を受け入れる過程のひとつであったとい

² 中古音（隋唐音）は、『広韻』（韻天網）および『漢字古今音資料庫』で検索し、王力の再構音をとった。

う。「口(く)」と同じ類型を持つのが表1の「頭(づ)」で、ほかにこれに類するものには、「豆(づ：大豆)」がある。「九(く)」と同型の単母音化が行われた呉音が表1の「留(る)」「有(う)」である。類例は、「右(う：右折)」「由(ゆ：経由)」「流(る：流布)」「修(しゅ：修行)」「就(じゅ：成就)」「富(ふ：富士)」「謀(む：謀反)」など多い。

音節構造	字	中古音	字音
CVC	工	kuŋ	く (呉音)

「工(く)」からはCVCの音節末のCが落ちている。このようにŋ・m・n・k・t・pの韻尾を持つ字がこれらの韻尾を捨象してCV構造の形で用いられたものは万葉仮名に見られ³、中国音の韻尾が日本語の上代漢字音でどう処理されていたのかの一側面を示している(沼本 1986 : 83-85)⁴。これに類するものには、「公(く：公家)」「貢(ぐ：年貢)」「奉(ぶ：奉行)」「功(く：功德)」「紅(ぐ：紅蓮)」などの呉音がある。

一方、呉音で脱落していた要素を取り入れたのが次に示す漢音である。漢音に対応する中古音の赤字は、なお字音に反映されていない要素を示す。

音節構造	字	中古音	字音
CSV	御	ŋio	ご (呉音)
		ŋio	ぎょ (漢音)
CSVV	九	kieu	く (呉音)
		kieu	きう (漢音)
CSVV	世	sei	せ (呉音)
		sei	せい (漢音)
CVC	工	kuŋ	く (呉音)
		kuŋ	こう (漢音)

上の例では、「御(ぎょ)」は拗音、「世(せい)」「工(こう)」は後に長音、「九(きう)」は後に「きゅう」となって拗長音を日本語にもたらした。ところが、日本語では、単母音は1拍、二重母音は2拍と捉えたので、結果的に、同じ字の音でありながら、呉音と漢音とで長さの違うものが生じたわけである。原音の構成を受け入れるため、原音にない拍というシステムが用いられることによって生まれた日本語の音の長短は、中国語母語話者のみならず、他の多くの言語を母語とする学習者にとって聞き分けることの難しいもののひとつとなっている。

³ 万葉仮名で中古音韻尾の/ŋ/を落として日本語音を表しているものには、「曾(そ)」「等・登(と)」「能(の)」「良(ら)」などがある。/n/が脱落した「安(あ)」、/l/が落ちた「吉(き)」などもよく使われ、これら韻尾を落とした形は、元来中国語でもCV構造を持つ「祖(そ)」「羅(ら)」「伎(き)」などと共存している。

⁴ もうひとつの側面として、こうした韻尾を生かしたものもあり、固有名詞以外は、例えば韻尾が/m/なら、それにiかuの母音を付けてミ、ムとするといった形にほぼ限定され(例：歎敢 kam なげかむ)、規則的だという(沼本 1986 : 84-86)

3. 呉音の単母音化—同じ音符グループに長短があるもの

2節で見たのは、同じ漢字に呉音と漢音とで長短の違いのある字だった。それは同じ音符グループの中の異なる字にも当てはまる。つまり、ある字の主に使われる字音が呉音なら短音、漢音なら長音になる。表2にその例を示す。()内は常用漢字音訓表にない字音である。

表2：同じ音符グループの字に長短のあるもの

音符	中古音	字1	呉音	漢音	字2	呉音	漢音
呆	pau	保	ほ	(ほう)	褒	(ほ)	ほう
九	kǐəu	九	く	きう	究	(く)	きう
留	liəu	留	る	りう	瑠	る	(りう)

単母音だった呉音から見れば、漢音「ほう」「きう」「りう」は現代語では長母音化した字音である。呉音・漢音ともに常用漢字の字音となっている「九」「留」と異なり、「保(ほ)」「褒(ほう)」「究(きう)」「瑠(る)」は呉音・漢音のうち、一方の字音が主に使われるため、「保(ほ)」「褒(ほう)」だけを対照すれば、同じ「呆」という音符を持ちながら、一方は短音、他方は長音を持つように見える。だが、「保」に「ほう(例：保元、神保町)」の音があることでもわかるように、これも長短の対比を持つようになった日本語が古い時代の呉音も維持したことから生じたものとも言える。

4. 上古音から中古音への変化と日本語受け入れに当たっての音節構造の単純化

同じ音符グループの中に、単母音 /i/ で終わる字(例：既)、連母音 /ai/ で終わる字(例：概・慨)が共存している例は少なくない。連母音は3節で取り上げたような長音ではないが、母音部分の構造の異なる字が音符グループ内に共存するという共通点を持つ。本節では、この「単母音と連母音の共存」現象を取り上げ、そうなったのはなぜなのかについて考えたい。

表3にその例を漢音で示す。なお、漢音を取り上げるのは、呉音には2節に述べたように単母音化した字音(例 会・絵：ゑ、解：げ)が少なくなく、また常用漢字の字音でないものがこの組み合わせを持つ字の半数近くあるためである。表3の中古音の赤字は漢音に反映されていない要素を示す。

表3：同じ音符グループ内の漢音に単母音の字と連母音の字があるもの

音符	字	上古音 韻母	中古音 韻母	漢音	語例
既	既	ǐəi	ǐəi	き	既婚
	概 慨	əi	ɒi	がい	概要 感慨
己	記 起 紀	ǐəi	ǐə	き	日記 起動 世紀
	己 忌				克己 忌避
	妃	ǐwəi	ǐwəi	ひ	王妃
	改	ə	ɒi	かい	改革
非	非 扉	ǐwəi	ǐwəi	ひ	是非 門扉
	悲	ǐəi	i	ひ	悲劇

	俳 排	eəi	ei	はい	俳句 排気
	輩	uəi	upi	はい	後輩
貴	貴	ɿwəi	ɿwəi	き	貴重
	遺	ɿwəi	wi	ゐ	遺産
	潰	uəi	upi	くわい	潰瘍

音符「既」を持つ字を見ると、上古音では、韻母のうち **ei** の部分が共通しており、押韻できたことがわかる。それが中古音では、「概・慨」の韻母が **pi** に変わっており、それを反映して日本語の漢音が「がい」という連母音を含む音になっている。一方、「既」の中古音韻母は **ɿei** だが、**ɿə** の部分は落として「き」と単母音化している。

これと同じように、表3の他の音符字でも、上古音で韻母の一部が共通だったのが、中古音では一部の字の主母音に変化があり、韻母が **/pi//upi//ei/** のように変わって、日本語漢音で連母音 **/ai/** として受け入れられるものが生じた（「改 俳 排 輩 潰」の各字）。漢音に連母音 **/ai/** を持つ字として受け入れたのは、「売 会 改 快 俳」のように中古音がそれぞれ **/ai, ai, pi, æi, ei/** で終わるもの、つまり主母音が前舌か後舌か、円唇か非円唇かに関わらず口の開きの広い広母音であるもので、それらの母音を日本人は日本語の「あ」の範疇に入る音として聞き取っていたのだろう。

一方、中古音自体が **/i/** で終わっているのをそのまま写して漢音でも単母音になったものが少数あった（「悲 遺」の各字）。

それ以外に単母音化した漢音には、表3を見ると、中舌母音 **/ə/** を持つという共通点がある。筆者が連母音・単母音の対立を持つ音符字群に限らず調査した範囲では、**/ə/** は、韻母内でそれより前に介音の **/i/** や **/i/** がなければ、母音 **/o/** として漢音に反映される（例：口 **kʰəu** こう、構 **kəu** こう）。さらに介音の **/i/** や **/i/** があっても、韻尾に **/u//ŋ//k/** のどれかがあれば、**/ə/** はオ列の直音または拗音の形で漢音に現れる（例：搜 **/ʃəu/** そう、勝 **/ɕiəŋ/** しょう、植 **/zɿək/** しょく）。だが、そのような条件に当てはまらなければ、韻母 **/iə//iəi/** のように赤字部分を捨象して単母音化した形が漢音となっている。表3に示した、赤字の **/ə/** を持つ中古音がそれに当たる（「記 起 紀 己 忌； 妃 非 扉 貴」の各字）。

このように、連母音と単母音の構造が同じ音符を持つ字群の中に共存するのは、中国語の上古音と中古音とで主母音に変化があったことが基本的な原因である。だが、それだけでなく、日本語に受け入れられる際、一定の条件下で音節構造の単純化が行われていたことが、多くの字で単母音の字音が実現したことにあずかっていると言える。

表3に掲げたもの以外にも、音符「衣」の「衣 依 (い)」と「哀 (あい)」(「既」型)、音符「台」の「治」「始」と「台 怠 胎」「治」(「己」型、音符「未」の「未 味 (み)」と「魅 (み)」「妹 昧 (まい)」(「貴」型)、音符「鬼」の「鬼 (き)」と「塊 (くわい)」(「貴」型)などが類例として挙げられる。

5. 慣用音による長短の逆転

次に、慣用音が長短の実現に関与する要因を取り上げたい。「比 (ひ)」「陛 (へい)」「批 (ひ)」の3字は、音符「比」を共有するが、「比・批」と「陛」とでは母音も長さも違う。この3字を見ると、

「陛」が仲間外れに見える。また、音符「禺」を持つ「偶」「遇」「隅」「愚」の4字を並べてみると、「愚」だけが「ぐ」という短音で、「ぐう」の読みを持つ他の3字と比べて特異に見える。だが、これは、3節で見たような「呉音が短音、漢音が長音」という組み合わせのどちらか一方がその字の主な読みになっているというものではない。ここで一部の字音の実現に関わっているのは「慣用音」である。「慣用音」とは、「呉音・漢音・唐音以外の、古来よく用いられている音」(湯沢 1987: 84)、別言すれば、元となった中国語音から転写するなら、そうはならないはずの字音を指す。だが、その慣用音が一般的に通用して常用漢字の字音となり、その結果本来の字音と長短が逆転したものがある。その例を表4に青字で示す。

表4：慣用音による長短の逆転

	上古音 韻母 ⁵	中古音 韻母	字	漢音の列	漢音	慣用音	語例
比	ǐei	i	比	イ	ひ	—	比較
	iei	iei	陛	エ	へい	—	陛下
	iei	iei	批	エ	(へい)	ひ	批判
禺	ɔ	əu	偶	オ	(ごう)	ぐう	偶然
	ǐwɔ	ǐu	愚	ウ	ぐ	—	愚痴
	ǐwɔ	ǐu	遇 隅	ウ	(ぐ)	ぐう	待遇 一隅

() 内は、中古音に基づけば、本来こうなるはずだったと考えられる字音だが、実際には「慣用音」の欄に示した青字の字音が現在常用漢字の字音として使われている。「批」は、中古音韻母 /iei/ を反映していれば、「陛」と同じように(韻母の赤字で示した最初の /i/ が落ち、)「へい」と読まれていたはずだが、「比」からの類推のためか、「ひ」という短音になっている。また、「遇」「隅」は、同じ中古音韻母を持つ「愚」同様、「ぐ」となるのではなく、慣用音で「ぐう」と読まれている。そして、「偶」は中古音の韻母が /əu/ なので、「ごう」となるはずが、慣用音で「ぐう」となっているため、「愚」以外の3字がいずれも「ぐう」となり、「愚」だけが例外に見えるわけである。

なお、中古音韻母は、「比」と「陛・批」とで異なっているが、上古音の主母音は共通であり、「比」を音符に持つ3字が押韻できたことがわかる。「偶」と「愚・遇・隅」も同様である。日本語の漢音は、変化した中古音の韻母を反映するはずだが、そうになっていない。そして、中古音を写せば日本語で長音になっていたはずの「批」が「ひ」という短音になり、短音になるべきだった「遇・隅」が「ぐう」という長音になるという具合に、長短の逆転が起きているのである。

6. 語彙の力

6. 1 「丁」を音符に持つ字

日本語に受け入れる際に音節構造が単純化されたことや慣用音による長短の逆転といった要因とは異なり、音符グループの字群の中で1字だけ唐音が定着した結果、その字群内に長短の違いが生じたというケースがある。それは、「丁」を音符に持ち、表5のように9字の常用漢字を持つグループであ

⁵ 『詩経』の時代の音を表す上古音擬音は、『漢字古今音資料庫』から王力のものをとった。

る。その9字の中で「打」だけが「だ」という短音、8字が「ちやう（ちょう）」「てい」などの長音を常用漢字の字音としている。

表5：「丁」を音符に持つ常用漢字

音符	字	字音	長さ
丁	町 庁 頂	ちやう	長
	停 亭 訂	てい	
	丁	ちやう てい	
	灯	とう	
	打	だ	短

「打」の字音「だ」を本稿では藤堂（1980b）に従って唐音とする。他の漢和辞典で「だ」を慣用音とするものもある。本節と6.2で後述するように、元になった中国語音は/ta/であり、禅宗で「只管打坐（しかんたぎ：ただひたすら坐禅すること）」と言うように当初は「た」として受け入れられていた。それが現代語では「だ」になっているという点を指して「慣用音」と言っているのだろう。一方、「だ」が中古音 /tien/や/ten/でなく、南宋で使われていた /ta/に基づいているという点や宋から禅僧が伝えた字音だという点を重視すれば、唐音（あるいは唐宋音）と呼ぶのが適切だということになる⁶。

唐音とは、「宋・元・明・清の中国音を伝えたものの総称。禅僧や商人などの往来に伴って主に中国江南地方の発音が伝えられた」（『広辞苑』第6版）もので、「明（みん、明朝体）」「経（きん、看経）」「行（あん、行脚）」「子（す、椅子）」「請（しん、普請）」など、唐音読みする語は限られている。「明（みん）」「経（きん）」など常用漢字表の字音でないものも少なくない。だが、中には、そのように限定的にのみ使用されるとは言えない例もある。例えば、「瓶」という字を見てまず思い浮かぶ読みは「びん」であろう。「びん」は唐音だが、「へい」という漢音や「びょう」という呉音より私たちにとってなじみのある字音である。それは、その字音で読む語、例えば「瓶」「ガラス瓶」「ビール瓶」「大瓶」などが現代の日常生活で日々使われるのに対し、「瓶子（へいじ）」や「華瓶（けびょう）」が主に古典や仏教などと結びついた文脈で見られるものとなっているためだと思われる。

本節では、「打」が「町」「停」「丁」などと異なり、呉音「ちやう（ちょう）」や漢音「てい」ではなく、現代語で主に唐音「だ（古くは「た）」と読まれるようになったのも、やはり「だ」と読む字音語の数と各語の頻度の大きさによるということデータを論じたい。表6のように、「打」と同じ音符を持つ多くの字は中古音を反映して呉音「ちやう」か漢音「てい」、またはその両方が定着している。

表6：「丁」を音符に持つ常用漢字の中古音と日本語の字音

字	中古音	呉音	漢音	唐音	語例
町	tchien	ちやう	(てい)		市町村
庁	tchien	ちやう	(てい)		県庁
頂	tien	ちやう	(てい)		頂上

⁶ 現代中国語はピンイン表記が da だが、この d は無声無気音で、IPA では /ta/ になる。

停	dien	(ぢやう)	てい		停止
亭	dien	(ぢやう)	てい	(ちん)	亭主
訂	dien	(ぢやう)	てい		訂正
丁	tien	ちやう	てい		一丁目 丁寧
灯	ten	とう	とう	(ちん)	灯台
打	tien teŋ	(ちやう)	(てい)	た (だ)	打撃

() 内は常用漢字の字音でないもの 赤字は唐音で失われている要素

「打」の中古音のひとつは /tien/ で、それを反映し、呉音は「ちやう」、漢音は「てい」である。もうひとつの中古音が /ten/ で、母音から見て、これが唐音「た (だ)」につながるものだと思われる。だが、表5に赤字で示した音節末の /ŋ/ は反映されていない。「亭」「灯」の唐音が「ちん」であるのを見れば、「だ」は唐音としても、かなり特異な音だと言えよう。

南宋の孫奕 (えき) の『履齋示兒編』によると、「打」は、当時すでに /ta/ と発音されて、語尾の /ŋ/ の音は失われていた (藤堂 1980b)。また、『六書故』という南宋の字書 (13 世紀) でも「打」の発音を /ta/ としている⁷ (『康熙字典』)。何らかの理由で鼻音韻尾 /ŋ/ が弱化して落ちてしまったようだ⁸。

後から入ってきた音に基づく「だ」が日本語で主たる字音になったのには、宋代の江南地方の音がもたらされただけでなく、日本語でそう読む語が多く出現したといった理由があるはずである。そこで、次節で「打」を含む字音語の初出を調べ、呉音「ちやう」と唐音「た (だ)」がいつ、どのような言葉とともに使われたかを確認したい。

6. 2 「打」を含む現代日本語の字音語の初出調査

「打」を含む現代日本語の字音語を「KanjiVocab36000」⁹ (徳弘 2010) および「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(NLB 中間検索) から抽出した。その結果、計 51 語 (「ちょう」2 語、「だ」49 語) を得た。また、初出は、『精選版日本国語大辞典』 (『日本国語大辞典』第 2 版に基づく) の初出例をとった。51 語中、『精選版日本国語大辞典』に用例と初出のあるもの 42 語を対象に初出の分布を見てみたい。

まず、「打」を「ちやう (ちょう)」と読む語が 2 語のみだったので、補助的に『広辞苑』第 6 版で「ちょう」と読む語を検索して、さらに 2 語を得た¹⁰。この 2 語は現代語とは言えないが、「打」を「ちやう」と読む語にどのようなものがあつたかを知るため、参考としたい。合わせて 4 語の初出は、表 7 のように 900 年前後から 1232 年の範囲にある。

⁷ 反切が「都假切」。都 /tu/ の声母 /t/ と假 /ka/ の韻母 /a/ で /ta/ となる。

⁸ 『漢字古今音資料庫』で現代の方言音を調べると、江南地方の呉語方言の一部には、「打」の字音に韻尾の /ŋ/ が残り /tan/ などとなっている (宜興、蘇州、三林糖など)。

⁹ 新聞に使われた語の頻度・親密度データ (天野・近藤 2000) に基づき、徳弘 (2010) が漢字を含む 36,000 語に学習指標値等を加えたもの。

¹⁰ 「丁丁 (発止) (ちょうちょうはっし)」は辞書の見出しには「打打」という表記もあるが、その表記の用例が見つからなかったため、取り上げなかった。

表7：「打 ちやう」初出

見出し語	読み	初出例 出典	成立・刊行	意味
*打ず	ちやうず	竹取物語	900 前後	打ちたたくこと
*毬打	ぎちやう	枕草子	995-1004 頃	杖でまりを打つ遊び
金打	きんちやう	左記	1180	誓いの印に刀の刃やつばを打ち合 わせること
打擲	ちやうちやく	御成敗式目	1232	打ちたたくこと

*：広辞苑から追加した語

次に、「打」を現代語で「だ」と読む40語には「安打」「打者」のような野球用語が多いが、それ以外の用法のある語と分けて観察したい。野球用語かどうかの判断は、『精選版日本国語大辞典』の意味記述を基準として行った。専ら野球・球技以外に用いるものを「だ1」とし、野球・球技にもそれ以外にも用いるものを「だ2」、専ら野球と一部の球技にのみ使われるものを「だ3」とする。

得られた結果は、「だ1」が13語、「だ2」が8語、「だ3」が19語だった。「だ1」の見出し語と初出を表8に示す。

表8：「打 だ1」専ら野球・球技以外に用いる語の初出 13語

見出し語	読み	初出例 出典	成立・刊行	時代
打開	だかい	正法眼蔵	1231-53	鎌倉
打破	だは	正法眼蔵	1231-53	鎌倉
打撲	だぼく	養生訓	1713	江戸
打倒	だとう	江戸繁盛記	1832-36	江戸
殴打	おうだ	経国美談	1883-84	明治
打電	だでん	風俗画報 199号	1899	明治
打算	ださん	吾輩は猫である	1905-06	明治
打算的	ださんてき	坑夫	1908	明治
打診	だしん	金毘羅	1909	明治
一網打尽	いちもうだじん	穩健なる自由思想家	1910	明治
打撲傷	だぼくしょう	明暗	1916	大正
打刻	だこく	道路運送車両法	1951	昭和
打楽器	だがっき	銀座二十四帖	1955	昭和

初出の最も早いものが「打開」「打破」の鎌倉時代で、唐音の伝えられた時期と重なる。出典の『正法眼蔵』は曹洞宗の開祖道元の著書である。道元は入宋して禅を学んだ僧であり、唐音を最初に日本に伝えた禅僧のひとりと言える。次は「打破」の用例である。

例：身仏さらに作仏にあらず、籬籠^{らろう}打破すれば坐仏さらに作仏をさへず。(『正法眼蔵』)

(現代文) 坐禅の姿はそのまま身仏であるから、さらに仏と作ることはないのだ。こうした執着の心を打破すれば坐禅した仏は重ねて仏と作ることが不要となる。(石井 2004)

「打破」は現代語では「だは」と読む。現代日本語で「打」を「た」と読む例は「只管打坐（しかんたざ）」（禅宗でひたすら坐禅をすること）のような固定した語句にしか残っていない。だが、「打」は南宋の音が /ta/ であるから、当初「た」と発音していた。田島（1977:163-164）によれば、『乾坤院本正法眼蔵（七十五巻本）』には 504 か所に延べ 777 字の字音を示すふりがながふられているが、訓や意味を示すふりがなとともに、大部分が親本から写された本来のものだという。『正法眼蔵』に「打」を含む字音語は上の 2 語以外にも「打坐（坐禅をすること）」「打鐘（鐘をつく）」「打眠（眠る）」など多いが、その中で「打」にふりがながあるのは、「打牛 タニウ（牛を打つ）」「打湯桶 タウツウ（湯桶）」「打併 タヒム（きちんと並べて掛ける）」「打破 タアホヲ（打ち破る）」の 4 か所 4 語である。このように「打」には「タ」と「タア」の二つがあるが、「チャウ（ちょう）」「テイ」など呉音漢音のふりがなは見当たらない。

同一の字に長短両様の字音ふりがながある例は、「打」以外にも、「慈悲」の「スヒ」と「スウヒイ」、「此」の「ス」と「スウ」がある。「タアホヲ」や「スウヒイ」は、南宋の中国語を耳で聞いた音に、より忠実に再現しようとしたものではないかと思われるが、それが日本語に定着することはなかったわけである。

「打破」の「タア」が /ta/ を表していたことは、室町時代の日本語を有声無声の別のあるポルトガル語のローマ字で表記した『日葡辞書』¹¹の見出し語が **Tafa** と綴られていることによっても確認できる。なお、「打」の読みが遅くとも明治時代に「だ」となっていたことについては、6.4 で述べる。

「打開」「打破」の 2 語に続くのが「打撲」（出典『養生訓』）で江戸中期に飛び、4 番目の「打倒」までが江戸時代である。それ以降の 9 語は明治時代初出となり、20 世紀初頭の「打診」「打算」「打撲傷」などを経て昭和の「打楽器」まで続く。

次に、「だ 2」の初出を表 9 に示す。江戸末期（「連打」）から昭和初期（「強打」）にかけて分布している。ここに挙げた語は、例えば「戸を連打し」「投手が連打を浴びる」のように野球以外にも野球にも使われるものである（例は『精選版日本国語大辞典』）。

表 9：「打 だ 2」 野球と球技・それ以外のどちらにも使う語の初出 8 語

見出し語	読み	初出例 出典	成立・刊行	時代
連打	れんだ	江戸繁盛記	1832-36	江戸
打点	だてん	米欧回覧実記	1877	明治
打撃	だげき	日本開化少史	1877-82	明治
乱打	らんだ	経国美談	1883-84	明治
打力	だりよく	毎日新聞	1904	明治
猛打	もうだ	東京日日新聞	1906	明治
痛打	つうだ	雑囊	1914	大正
強打	きょうだ	若い人	1933-37	昭和

さらに、野球用語である「だ 3」19 語について初出を見ると、最も古い「打順」が 1898 年（出典『新

¹¹ 『日葡辞書』はイエズス会宣教師数名の共編、1603-4 年長崎学林刊。約 32,800 の日本語を採集し、ポルトガル語で語釈した辞書で、宣教師らの日本語修得の便を図ったもの（精選版日本国語大辞典）。編集には複数の日本人も関与した（森田 1993：14）。ローマ字表記によって当時の発音を知ることができる。

式ベースボール』)であり、「打球」とともに明治時代2語、大正時代3語(打者、強打者、安打)、昭和時代14語(二塁打、打棒、長打、三塁打、本塁打、単打、代打、打数、打席、打率、凡打、快打、打線、塁打)である。

野球は、1872年に伝えられ、学校野球、大学野球として広まった。プロ野球が始まるのは昭和になってからのことである。「野球」という訳語がつくられたのは1894年だという¹²。「だ3」の19語は、これに次いで訳されていったもので、昭和になってからの初出が多いのはプロ野球の歴史と歩みを共にしていると言えるかもしれない。

「打(ちやう、だ)」の初出時期をまとめると、次のようになる。

- ちやう：4語 9世紀後半から13世紀前半
- だ1：13語 13世紀以降。多くは明治以降に出現
- だ2：8語 19世紀以降。
- だ3：19語 19世紀以降。多くは昭和以降に出現。

「ちやう(ちょう)」が古い語の読みに限られ、「だ」は主に近代になって生まれた語の字音であり、特に40語中27語が野球に使われるものであることがわかる。また、「ちやう(ちょう)」と読む4語に対して、「だ」と読む語は初出がわかるものだけでも40語の豊富な語群を持っている。では、各語の現代語における使用頻度はどうだろうか。次の節では、本節で初出を見たうち、「打ず」と「塁打」を除いた42語について、『現代日本語書き言葉コーパス(BCCWJ)』によって頻度を調べてみたい。

6.3 「打」を含む現代日本語の字音語の頻度調査

『現代日本語書き言葉コーパス(BCCWJ)』を検索エンジン「中納言」で語彙素によって「打(ちやう、だ)」を含む42語の使用頻度調査を行った¹³(中納言2.4、データバージョン1.1)。6.2で初出調査をした44語から「打ず」「塁打」を除いたものである。表10にその結果を頻度順に示す。

表10:「打」を含む字音語の使用頻度(BCCWJ・中納言)

語	頻度	語	頻度	語	頻度
1 打撃	1110	15 打数	178	29 強打者	33
2 安打	840	16 代打	170	30 猛打	30
3 打者	612	17 連打	156	31 乱打	25
4 打線	486	18 強打	132	32 打撲傷	23
5 打開	392	19 打撲	127	33 痛打	21
6 本塁打	373	20 打楽器	119	34 打擲	20
7 打席	365	21 殴打	89	35 打力	19
8 打破	322	22 打算	81	36 塁打	18
9 打球	321	23 長打	62	37 打刻	11

¹² 「日本野球の歴史」(財)野球殿堂博物館

¹³ 手早くBCCWJの頻度を見るにはNINJAL-LWP for BCCWJ(NLB)の中間一致検索が使いやすいが、NLBでは一括してデータのダウンロードができないため、中納言で検索した。

10	打倒	284	24	三塁打	61	38	凡打	11
11	打点	281	25	打順	61	39	快打	7
12	打率	227	26	打電	56	40	打棒	6
13	打診	220	27	一網打尽	42	41	単打	3
14	二塁打	189	28	打算的	36	42	金打	2

 ちょう だ1 だ2 だ3

表9の頻度は、ノイズを差し引いた値になっている。例えば42番「金打」は人名1件と将棋の「7二金打」1件は数えていない。「ちょう」と読む「打擲」は34番目、「金打」は42番目にあり、頻度の低さからも、呉音「ちょう」が「打」の常用漢字字音となっていないことが理由付けられる。「だ」と読む字音語は、上位10語のうち7語が「打撃」「安打」「打者」など野球に使われるものであり、hitやbatに対応して多くの訳語を生み出し、高い使用頻度を持つに至ったことが見てとれる。

最も頻度の高い「打撃」は、「他を攻めくじく」という第一義¹⁴から「すぐには立ち直れないような心の痛手や物質上の損害」という意味が生じ、BCCWJでは「打撃を受ける／与える／被る」「大きな／深刻な／壊滅的な打撃」などのコロケーションで使われている。次いで野球用語としても使われるようになり、BCCWJには「打撃力／打撃コーチ／打撃練習」「打撃陣／打撃戦」などの複合語・派生語が見られる。「打撃」は、幅広く使われ、非常に造語力の高い語の一例だと言える。

また、野球に使われる語が高頻度であるだけでなく、「打開」「打破」「打撲」「打倒」は、中世、近世に初出があり、現代語としてもなおよく使われている。「打開する」「打破する」は、ともに「(この)状況／現状を」との共起頻度が高い。

一般的にはあまり広く使われない唐音が現代語で「打」の主たる字音となった。それを支え、推し進めたのが「打(だ)」の近代におけるこうした語彙の拡張とその基礎にあった中世からの複数の字音語だったと考えられる。同時に、呉音「ちやう」で読む語が現代語では、ごく限られた範囲でしか使われないこともその要因のひとつとなっている。いわば「語彙の力」で新参者の「だ(た)」が古参の「ちやう(ちょう)」を隅に追いやり、現代語で主たる字音の地位を占めたのだと言えよう。

次節では、初出の時代と現代の間を埋めるものとして、『日本語歴史コーパス(CHJ)』でいくつかの語の使用実態を見てみたい。

6.4 「打」を含む字音語の日本語歴史コーパス調査

現代語であまり使われなくなっている「金打」「打擲」は、初出の平安・鎌倉時代以降、どのぐらい使われていたのか。また、「打開」「打破」は、鎌倉時代に現れたあと、継続して使われていたのか。こうしたことを知るために、国立国語研究所で開発中の『日本語歴史コーパス(CHJ)』を検索してみた。

CHJ(中納言2.4.4 データバージョン2019.3)では、奈良時代から昭和に至るまでの和歌、物語、日記、随筆、説話、狂言、キリシタン資料、洒落本、人情本、雑誌、教科書などが公開されている。その範囲で上記4語について調べてみると、次のことがわかった。

- ・金打(きんちやう) 明治時代の雑誌に2件のみ。(ノイズ2件除外)

¹⁴ 『精選版日本国語大辞典』による。

例：武士の金打に依つて誓ひたる一言は千鈞よりも重く（1901『太陽』）

・打擲（ちやうちやく） 65 件中、天草本伊曾保物語 9 件、狂言 30 件、洒落本・人情本 10 件、明治・大正の雑誌 16 件

例：汝は何故に猫を打擲するぞ（1593 天草本伊曾保物語。伊曾保：イソップ）

・打開 明治以降の雑誌に 34 件（ノイズ 2 件除外）

例：この行き詰りを打開して、そこに新しいものを生み出す（1925「近代文明と發明」『太陽』）

・打破 明治以降の雑誌に 255 件（ノイズ 3 件除外）

例：現状打破の目的を達し得べきや否は疑はしとすべし。（1909「政黨首領としての桂侯」『太陽』）
このように、CHJ では、「ちやう（ちょう）」と読む「打擲」がキリシタン資料、狂言など、室町時代の口語資料に多く出現しているのに対して、「だ」と読む「打開」「打破」は鎌倉・室町・江戸時代の資料にはなく、『正法眼蔵』の例に続くような用例がない。恐らく禅宗などで用いられるやや硬い漢語であり、鎌倉時代の説話や室町時代の口語資料に使われるには至らなかったのではないだろうか。中世・近世の資料には和語「打ち破る」があり、「敵を攻めて負かす」や「障害となっていたものを取り除く」など「打破」との用法の重なりも見られる。そのことから、それらの概念はこれらの口語資料では和語でまかなわれていたのではないかと予想されるが、これについては稿を改めて述べたい。

「打」の読みだが、今回の調査では、いつごろ「た」から「だ」になったのかはわかっていない。が、CHJ の 1894 年の用例「舊來のものは盡く打破せられたり。」（女学雑誌）には「だは」とふりがながふられており、遅くともこの時期には「打」が「た」でなく「だ」と読まれていたことがわかる。

最後に、「打開」と「打破」を比べると、BCCWJ（中納言検索）では、頻度が「打開」392、「打破」322 だが、CHJ では「打開」34、「打破」256 と差が大きい。CHJ を見ると、「打開」は 8 割以上が昭和の用例であるのに対し、「打破」は用例の 6 割以上を明治が占める。「打破」は、その対象として「現状」「弊習」「舊習」「階級制度」「藩閥」「官僚政治」などと多く共起している。近代語の歴史において、「打破」のほうが「打開」より早くからよく使われるようになっていたことがわかる。

7. まとめと今後の課題

同じ音符グループの字は母音や長さを共有することが多いが、そうでないものもある。それはなぜか。教材開発の過程で生じた、この疑問に対して、今回の調査でわかったのは次のことである。

- 1) 同じ字でも呉音と漢音で長さの違うものがある。それは、日本語に元来なかった二重母音、三重母音を受け入れる過程で、最初単母音化したものが呉音の古い層にあり、それが現代語に至るまで残ったことによる。 例：九 く（呉音）、きゅう（漢音）
- 2) これと同じことが音符グループの中で起こると、単母音化した呉音をとる字は短く、二重母音をある程度受け入れた漢音をとる字は長いというケースが生じる。

例 音符 呆：保 ほ（呉音）、褒 ほう（漢音）

- 3) ひとつの音符グループ内で、ある字は単母音で、ある字は連母音というケースもある。中国語の上古音と中古音とでは主母音に変化があったことが日本語音に違いが生じた基本的な原因だが、日本語に受け入れられる際、音節構造の単純化が行われていたことが、多くの字で単母音の字音が実現したことにあづかっている。

例 音符 己：記 起 紀 己 忌（き）、妃（ひ）；改（かい）

- 4) 慣用音によって、本来単母音のはずの字が長くなったり、逆に長いはずのものが短くなったりす

るケースも見られる。

例 音符 比： 比 (ひ) 陛 (へい) 批 (へい→ひ)

- 5) 語彙の力で、唐音が呉音漢音より一般的になった例がある。「打」を「だ」と読む字音語は特に近代以降、古くからあった「打開」「打破」などが使用頻度を急増させると同時に、野球の普及も手伝い、多くの訳語を生み出した。同じ音符グループの字に長短の違いが生じたのは、こうして「打」だけ唐音（の特異なもの）が主な字音となったためである。

例 音符 丁： 町 庁 頂 (ちょう)、停 亭 訂 (てい)、丁 (ちょう、てい)、
灯 (とう) ; 打 (だ)

1)から4)までが音節構造から見た字音受容と変化の歴史であるのに対し、5)では、特定の字音が日本語の主たる読みになった要因として、その字音を含む語がある時期に数多く作られ、高頻度に使われるようになったという語彙史の側面を取り上げた。そこには、まだわからない点が残っており、「打」の字音が「た」から「だ」となった時期、和語の類義語との関わりなどについても知ることが今後の課題である。

参考文献

- 黒沢晶子(2011)「中国語母語話者と入声音ー『循環型社会をジゲンし』とは?ー」『日本語教育連絡会議論文集』vol.23, 137-145.
- 黒沢晶子(2013)「漢字音教材開発ー入声音を含む漢語の音変化をどう扱うかー」『日本語教育方法研究会誌』20-1.
- 黒沢晶子(2015)「漢字音教材開発ー音符の活用ー」『日本語教育方法研究会誌』22-1.
- 黒沢晶子(2016)「漢字音の長音教材ー中国語母語話者と非母語話者を対象に」『日本語教育連絡会議論文集』vol.29, 147-157.
- 黒沢晶子(2017)「漢字音の清濁を何から見分けるか」『日本語教育連絡会議論文集』vol.30, 103-117.
- 河野六郎 (1976/1979)「日本呉音について」『河野六郎著作集2』平凡社
- 田島毓堂 (1977)『正法眼蔵の國語學的研究』笠間書院
- 田島毓堂 (1978)『正法眼蔵の國語學的研究 資料篇』笠間書院
- 藤堂明保 (1957/1980a)『中国語音韻論ーその歴史的研究』光生館
- 藤堂明保 (1980b)「中国の文字とことば」藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社
- 沼本克明 (1986)『日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 湯沢質幸 (1987)「漢字の慣用音」佐藤喜代治編『漢字講座 第3巻 (漢字と日本語)』明治書院

参考資料

- 天野成昭・近藤公久 (1999・2000/2003)『日本語の語彙特性』第1~7巻 三省堂
- 石井恭二 (2004)『現代文訳 正法眼蔵1』河出書房新社
- 韻典網 2.6版 <<http://ytenx.org/kyonh/>>
- 『広韻』『中原音韻』等の韻書の検索ができる。声母、韻母の再構音一覧を付す。『広韻』のデータは、『宋本 広韻データ』に基づいている。
- 鎌田正・米山寅太郎 (2012)『新漢語林 第二版』大修館書店
- 国立国語研究所 (2019)『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版』(BCCWJ) ver. 1.1

<<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>>
国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス（CHJ）』バージョン 2019.3 <<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>>
小学館国語辞典編集部編（2005-2006）『精選版日本国語大辞典』小学館
白川静（2003）『字通』平凡社
新村出編（2008）『広辞苑』第六版 岩波書店
宋本広韻データ<<http://kanji-database.sourceforge.net/dict/sbgy/index.html>>
科研費 基盤研究 C「次世代古典文献データベース 構築の基礎的研究」（平成 14～16 年度、課題番号：
14510494、研究代表者：村越貴代美）による成果の一
臺灣大學中國文學系・中央研究院資訊科學研究所（2012）『漢字古今音資料庫』
<<http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/ccr/#>>
張玉書・陳廷敬他編（1716）『康熙字典』<<https://ctext.org/kangxi-zidian/zh>>
土井忠生・森田武・長南実編訳（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店
藤堂明保編（1980b）『学研漢和大事典』学研
藤堂明保編（2006）『漢字源』学研
徳弘康代（2010）『日本語学習のためのよく使う順漢字 2100』三省堂
増谷文雄訳注（2004）『正法眼蔵』講談社
森田武編（1989）『邦訳日葡辞書索引』岩波書店
森田武（1993）『日葡辞書提要』清文堂出版
野球殿堂博物館（2019）「日本野球の歴史」
<http://www.baseball-museum.or.jp/books/summary/pdf/2011_history.pdf>
山本康喬（2012）『新しい漢字学習法 漢字音符字典 増補改訂版』東京堂出版
NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）ver.1.40 <<http://nlb.ninjal.ac.jp/>>
Sturgeon, D. 編（2006-2020）Chinese Text Project（中國哲學書電子化計劃）<<http://ctext.org>>